京都大学	博士(文学)	氏名	南　澤　良　彦
論文題目	南北朝隋唐明堂研究		

（論文内容の要旨）

目　次

主論文要旨 …… 1
　本論文の研究目的 …… 1
　本論文の要旨 …… 2
　本論文の研究意義 …… 4

本論文の研究目的

明堂は歴代の王朝がその建立を企圖した禮制建築物であったが、信頼に足る文獻が十分でないために、經學上最も紛糾を極めた問題の一つであった。明堂の意義とその制度については、朝野の經學者や歴史家はもちろん、文系理系の官僚・政治家、それに王侯貴族までもが、その議論に加わった。明堂の問題は經學の範疇に止まらず、政治の範疇に屬する廣範な問題であり、經學者と非經學者との間の問題意識は必ずしも一致せず、歴代王朝の明堂建立に際しては、經學者が主導權を握ることはむしろ稀であった。明堂の問題を議論する上では經學的知識が必要不可欠であるが、經學者と非經學者とでは經學に對する尊重の度合いに違いがあり、明堂の問題は經學を踏まえながらも經學の枠を超えて比較的自由に議論が行われた。

南北朝隋唐時代は、分裂の時代であった南北朝時代と統一の時代であった隋唐時代とに分けられる。學術の面では南北朝時代は南朝が北朝に優越しており、隋唐による南北朝統一後も南朝優位の形勢で融和が圖られたが、政治の面では南北朝時代は南北兩朝が拮抗しており、隋唐の南北朝統一は北朝側からの南朝吸收であったから、この時代の人士の心性は南人・北人共に些か複雜である。明堂に關する議論は、南北朝隋唐時代の複雜な人士の心性を反映し、また經學者と非經學者との關係もが影響した結果、經學が常に直面する問題、すなわち學問と政治との關係性の問題がきわめて先鋭的に露呈する。中國の古典古代と言える漢代にひとまず完成した經學は、中世に於いて解體し再構築される。この時代に歴史學や地理學といった人文社會科學的學問、天文暦法といった自然科學的學問がそれから獨立するなど、經學の覆う學問領域は縮小した。しかしながら、經學は漢代に取り結んだ政治との深い關係により諸學問の共通知識となることで、却って永續的な生命力を贏ち得た。

明堂は經學的に、また政治的にきわめて重要な問題でありながら、不確定要素が餘

りにも多く、それ故に／それにも拘わらず、經學者、官僚政治家、権力者等が蝟集し、それぞれの思惑が交錯した厖大な數の論説・議論が遺された案件である。そして、南北朝隋唐時代はその情況が最高潮に達した時代である。明堂に關する思想の形成・傳承・變化の諸相がまざまざと立ち現れた南北朝隋唐時代の明堂を研究することは、思想史的にきわめて興味深い。すなわち、經學の政治的屬性が最も顯著な南北朝隋唐時代の明堂を思想史的に研究すれば、南北兩朝及び隋唐時代の明堂觀及びその時代の經學 ― 延いては學術の特質の一斑を解明出來よう。

本論文の要旨

第一章では、兩漢魏晉の明堂について檢討した。上古の明堂は帝王が諸侯を朝見させる堂であった。前漢の武帝の泰山明堂は升仙を目的とする堂であった。後漢の明堂は五帝を祭祀し、月令を實行する堂であった。曹魏は後漢の明堂を繼續使用した。西晉は初め武帝の外祖父の王肅の説に從い、明堂に昊天上帝だけを祭った。

第二章では、南朝宋時代の明堂創建に當って行われた論議を檢討し、併せて明堂祭祀に際して使用された謝莊の「明堂歌」について詳細に分析した。

劉宋の明堂は鄭玄のプランに依據して祭祀の對象を始めとする儀禮の詳細を決定した。祭祀の對象は東方青帝靈威仰等の五方天帝である。謝莊の明堂歌は、五行説の思想的側面や典據など歌詞の語彙自體の表現するイメージの他、五行説に基づく言葉遊び、音韻や聲律上の知識を驅使した傑作である。特筆すべきは、この明堂歌に歌われた五帝が能吏然とした神神であり、この五帝の特性が、最先端の科學的知見に由來することだ。

第三章では、南朝の齊・梁・陳時代の明堂制度の特質を考察した。

南齊の初め、王儉は明堂祭祀廢止論に反論して、「五帝大神、義不可略。」と主張した。梁の武帝は、明堂營域内に大殿を建てて五帝を祭り、小殿を建てて五官の神を祭った。陳も齊梁の制度を踏襲した。すなわち、南朝の明堂は一貫して五帝を祭ったのである。五帝はすなわち五行の神であり、それぞれ五行五方位を司り、四時の運行に責任を有する。歴代の皇帝は四時の運行をスムーズにし、天下に秩序有らしめんが爲に、明堂に於いて五帝を祭祀したのである。

第四章及び第五章では、北朝の明堂に研究對象を移し、華北を統一し南朝に對峙した北魏と北朝から出て南北朝を統一した隋の明堂觀を考察した。

北魏は孝文帝の時に平城に明堂を建立した。その靈臺・辟雍と一體である構造は、漢代の儒者たちの理想とする明堂のイメージに沿っていた。洛陽遷都以後、北魏の知識人たちは明堂・辟雍・靈臺を一體とする九室の平城明堂を否定し、五室の明堂を立てることを支持し、肅宗時に五室の明堂は建立された。隋代には明堂はついに建立されることはなかったが、牛弘や宇文愷のような知識人たちは自らの抱く明堂の理念とプランとを提議した。彼らが概ね一致した認識は、天人相關思想に基づき、帝王は地

上に天上の星座を模倣し、基本的に周制に依據し、「五室九階、上圓下方、四阿重屋、四旁兩門」からなる明堂を建立しなくてはならないが、經典は全面的に依據する必要はなく、時代の變化に追從し、取捨選擇を加えて構わないということである。注目に値するのは、彼らがマニュアルの類である儀注を經典に次ぐ信頼すべき文獻と見なしたことである。

第六章では、太宗期・高宗期・則天武后期・玄宗以降における明堂觀を示す主要な言説を取り上げ、唐の明堂制度の變遷を詳細に檢討した。

唐の太宗李世民は天下を平定するや明堂建立の意志を表明した。孔穎達を代表とする儒者官僚は學派の枠から自由ではなく、互いに批判し合った。魏徵のような政治家は、「自我而作、何必師古」の信念を持し、先例に拘泥しない、後世の範となる唐王朝による革新的な明堂建立を提議した。顔師古のような歴史家官僚は、學者の瑣末主義を排し、唐代に始まり萬代に傳える「大唐の明堂」の「創造」を建言した。高宗は「自我作古」の意氣込みを以て、唐以前の中國の傳統文化を踏まえながらそれを乗り越え、唐以後繼承されるべき新しい明堂のスタンダードを打ち立てようとしたが、明堂の建立寸前に世を去った。則天武后もまた、「自我作古」の信念の持ち主で、唐以前の傳統文化を換骨奪胎し、そのエッセンスだけを抽出して新式明堂に注入したが、雜多な意見を無定見に採用したため、無節操な祭祀空間となった。玄宗は明堂を維持する意欲が薄弱であった。彼は生れながらにして正統王朝の嫡子だったからであり、即位した彼に引き繼がれた明堂は正統性ではなく忌わしさの象徵でしかなかったからである。玄宗の制定した唐を代表する禮典である『開元禮』は『貞觀禮』と『顯慶禮』とを折衷したと言われるが、明堂の規定に關するかぎり、その折衷の仕方は、取捨選擇ではなく兩論併記であり、一貫した理論はない。それは無節操に祭祀對象を增多した則天武后の明堂の式典空間の情況をそのまま反映したに過ぎない。

第七章では、晉の裴頠が唱えた明堂「一屋之論」とそれが南北朝隋唐の明堂に及ぼした影響とを論じた。裴頠は群儒の明堂論爭が決着を見ないのは、「理據」すなわち理論的根據とすべき經典の不足に原因があると考え、「一屋之論」すなわち經典に根據のない「殿屋」だけを建立し、「崇嚴父之祀」の儀禮だけを行うプランを建議した。南朝に於いては、劉宋の明堂が裴頠「一屋之論」に依據し、續く南齊・梁・陳の三王朝の明堂も裴頠「一屋之論」の影響下にあったが、いずれも、裴頠「一屋之論」に依據しつつ且つ獨自の工夫を凝らした。裴頠「一屋之論」を採用することによって、從前の華北に於ける經學論爭をリセットし、新たなる明堂論議を開始することを可能にした結果、裴頠「一屋之論」さえ相對化し、王朝ごとに獨特なる特徵を有する明堂制度を創出したのである。北朝隋唐に於いては、裴頠「一屋之論」は常に排斥の對象であった。北魏世宗期の袁翻や李謐のような儒學者達にとって、裴頠「一屋之論」は、傳統的經學の範疇を逸脱した異端の論説であるが故に批判の對象であった。東魏の李業興のような方術的傾向のある儒學者にとっては、裴頠「一屋之論」は明堂の象徵性的要

素を剝奪したが故に批判對象となった。隋の牛弘や宇文愷のような實務に長けた官僚政治家達は、明堂制度も含め禮制が相對的であり、經典も取捨選擇が許されると考えるから、裴頠「一屋之論」自體はもはや批判對象ではなく、南朝明堂の宇宙論的象徴性缺如の要因として批判される。

本論文の研究意義

本論文の研究目的は、經學の政治的屬性が最も顯著な南北朝隋唐時代の明堂を研究することによって、南北兩朝及び隋唐時代の明堂觀及びその時代の經學 ― 延いては學術の特質の一斑を解明することであった。この研究目的が達成されていれば、本論文の研究意義は大いに認められよう。個個の章で得られた成果を確認して、そのことを檢證しよう。

第一章は前史を述べたものであり、新知見は特にない。

第二章では、南朝宋時代の明堂創建と謝莊の「明堂歌」を檢討した結果、禮制上重要な機能を果たす明堂は、經學の學的傳統を踏まえながらも、時代ごとに意匠を更新していくことを解明した。また謝莊の「明堂歌」が極めて體系的且つ實際の觀測に裏打ちされた最先端の科學的知見に基づくものであることを初めて解明した。この分析は劃期的な研究であり、從來閑却されてきた祭祀歌を分析することによって、その作者の世界觀を理解し、その世界觀の背景にある思想の系譜を解明する意義の重要性を認識させた。

第三章では、南朝時代の明堂制度は、祭祀の時期や祭祀施設の構造さえ定論を見ないほど、未確定の要素が多く、また、南齊建國當初に明堂祭祀不要論が興ったように、南朝の人士のすべてが明堂に關心を拂い、その祭祀を尊重したわけでなかったことを解明した。また同時に、明堂祭祀不要論に王儉が即座に反論したように、優れた學者・官僚にとって明堂は皇帝政治を支える禮制上不可缺の構成要素となっており、梁の武帝の建造した新明堂が同じく新造した太極殿及び太廟と竝んで帝都に威容を誇ったように、その規模の廣壯と意匠の細部にまで施された象徴性とによって皇帝政治の理想的世界觀を顯示する壯麗なる裝置であったことも明快に論じた。

第四章及び第五章で特筆すべき成果は、北朝に屬する北魏と隋との明堂觀が孰れも「上圓下方」の觀念に強く固執する點を解明したことである。上圓下方の觀念は中國における最も古い宇宙觀の一つであるが、明堂固有の屬性ではなかった。この觀念は漢代以後になって始めて明堂と結びつけられたのであり、南朝の漢人はその歴史的經緯を熟知していたので、この觀念に拘泥しなかった。これに對して、北朝の北魏や隋の爲政者は明堂に關する文獻を等し並にして、眞摯に學び、上圓下方の觀念を明堂の根源的屬性の一つと確信した。明堂は本來、受命の帝王のみが建立できる建築物であると考えられてきた。それ故に、北魏や隋の皇帝はみな明堂を建立して自己の王朝の正統性を標榜しようとし、その形狀を上圓下方にして中國の宇宙觀を理解しているこ

とを誇示しようとしたのである。

第六章では、唐代に起こった明堂建立の三度の氣運を考察し、孰れも同じ「自我作古」の意氣込みを持ちながらも、微妙なニュアンスの違いがあることを解明した。すなわち、太宗期には、先例に拘泥しない後世の範となる唐王朝による革新的な明堂建立を提議し、高宗期には、唐以前の中國の傳統文化を踏まえながらそれを乗り越え、唐以後繼承されるべき新しい明堂のスタンダードを打ち立てようとし、則天武后期には、唐以前の傳統文化を換骨奪胎し、そのエッセンスだけを抽出して新式明堂に注入したのである。これらの三期、とりわけ高宗期と則天武后期との間の明堂觀の差異を指摘したことは、明堂研究にとっても、今後の唐代思想研究にとっても重要である。

また、玄宗の明堂觀を考察して得られた成果は、端的に言って、明堂は必ずしも必要ではないということである。敷衍して言えば、明堂は受命の王者のみが立てることができるが、受命の王者が必ず明堂を立てる必要はない。言い換えれば、明堂は正統性の證しであり、正統性を誇示する必要のある王者は切實に明堂建立を希求するが、正統性が自明の王者はそのような熱意に突き動かされる動機を持たないということである。これは衝撃的であるが、明堂問題の本質を突く発見であった。

最終章である第七章では、裴頠の「一屋之論」とその南北朝隋唐の明堂に及ぼした影響を考察した。裴頠の所謂「一屋之論」を初めて正當に評價し、詳細に研究したのは本論文最大の功績の一つであり、それ自體大きな研究意義が認められるが、次のような知見を得られたことも大きな收穫であった。すなわち、異民族出身でありながら中華の中心に政權を樹立した北朝及び隋の諸王朝は、一方では中國の古典文化の完璧な繼承者たらんとして、明堂に關する學問的遺産を可能な限り網羅的に研究し、一方では新興勢力ゆえの南朝への對抗意識から、中國傳統の宇宙論的象徴性の過剰な演出を彼らの明堂に施したのである。

南北朝隋唐時代の明堂は、晉の裴頠の明堂論を對立軸の契機とした。裴頠の明堂論―「一屋之論」は經學上のアポリアをエポケーという手段で解決した一種諧謔的なプランであった。いかにも魏晉的なその趣向は南朝人士の嗜好に合致したと見え、彼らの明堂計劃の中に採用されるが、北人の間ではきわめて評判が悪く、その經學的根據(理據）の無さによって恰好の批判の對象とされた。南北兩朝の士人の明堂觀の相違がこのような對照的な結果を生んだのである。

明堂の問題を北朝の人士は所與の難解な課題と見なし、南朝の士人は能動的に參畫する創作物と考えた。この點にこそ南北兩朝の經學の特質の相違が露呈している。唐王朝の明堂は一見すると獨創的であった。しかしながら、それは南朝の明堂觀に觸發されたのではなく、明堂を所與と見なす北朝の明堂觀を繼承しながら、難解なパズルをより完璧に解答して見せようとする技術的努力の賜であって、隋代から顯著になった儀注の重視に見られるように、むしろ經學を相對化するベクトルに働く、經學とは異なる別の有力な動機からするものであった。ここには唐代の學術の特質の一斑が現

れている。

以上が本論文で得られた知見である。これらの知見の及ぶ範圍は、すでに南北朝隋唐時代の明堂觀ばかりでなく、この時代の經學の特質、さらには學術の特質にまで至る。本論文の研究目的は達成されたのであり、ここに十分な研究意義を見出だせる。

（論文審査の結果の要旨）

俗に「礼家聚訟」と称せられることからうかがえるように、中国の礼学においては議論紛糾、古来より定説なき問題があまた存在するが、「明堂」は郊祀や禘祫と並ぶその最たるものの一つである。明堂に関する議論はすでに先秦期に見えるが、それが現実の具体的問題となるのは前漢武帝期であり、さらに礼学上の問題として先鋭化するのは後漢末になってのことである。以来、千七百年にもわたって議論が延々と繰り広げられてきた。明堂がかくも重視されたのは、礼教国家を標榜する王朝にとって、礼は国家統治の根幹であり、明堂はその礼制を象徴する建物であったからである。すなわち、明堂をめぐる論議は中国の伝統的学術の精粋であり、そこには深い思想性が内在しているのである。

明堂は、このように礼学上最もホットな問題であると同時に、中国学術史・思想史においても極めて重要な意義を有しているにもかかわらず、経学ないし礼学の衰退とともに、中国思想史の研究対象からは除外され、この数十年間、ほとんど研究がなされないままにうちすぎてきた。中国においても状況は似たようなもので、人民共和国成立以来、経学は冷遇され、とくに礼学は文字通りの繁文縟礼、単なる煩瑣な旧道徳の下僕と見なされてきたのである。近年、中国においては国学復興の気運が漲り、その気運に乗じて礼学の価値も再評価され始めたが、明堂への関心は依然として低調であり、明堂の専門研究が現れ始めたのはごく最近になってのことである。論者は夙に明堂（論）の学術史・思想史的意義に着目し、二十年来、研究を積み重ねてきた。本論文はその明堂（論）研究の集大成である。

本論文の性格を一言以て蔽えば、「篤実」なる語が何よりふさわしいであろう。明堂に関係する言説を丹念に集め、それを慎重に読解分析して、その明堂論がいかなる特色を有しているかを定め、その明堂論史上における意義を考察する。この作業が時代を逐って篤実に繰り返されている。それ故に、長年にわたって個別に書かれた論文の集成であるにもかかわらず、本論文は非常にまとまりがよく、論述に一貫性が認められる。その結果として、各時代ごとの明堂理念の変遷についても的確で平明な論述が行われている。これは本論文の長所としてまず第一に挙げて然るべきものと言える。もっとも、独創性という点では不満を呈する向きもあるかもしれない。と言うのは、かかる方法は、言うまでもなく、文献実証的研究の常道であるからである。がしかし、明堂論のような礼学に関わる主題の場合には、文献実証的研究以外に採るべき道はなく、一切奇をてらわず、実直に常道に一貫して従ったことが本論文を成功に導いたことに疑いの余地はない。

本論文では随所に新知見が提示されているが、それは丹念に一つ一つの明堂に関する言説を探査していく中ではじめてもたらされたものである。中でも特筆すべき成果は、清朝の明堂論の中ではほとんど注目されてこなかった劉宋の詩人謝荘の「明堂歌」と晋の裴頠「一屋之論」の再評価である。とくに後者が南北朝期の明堂論の中で繰り

返し引用され、大きな影響力を持っていたことの発見、並びに「一屋之論」の復元は本論文の大きな功績である。また南朝よりむしろ北朝のほうが伝統理念に沿った明堂の復活に熱心であったことや、「上円下方」に固執したのもやはり北朝の北魏や隋であったことなどを論証することによって、従来、漠然と言われてきた北朝の礼学が南朝のそれに比してむしろ正統的たらんとしたという説に確実な一証を与えたことも、礼学研究に対する大きな貢献と言えよう。従来の南北朝文化史研究ではおおむね南朝側のほうの比重が大きかったのに対して、北朝にも同等の重みを与えているのが本論文の特色である。

資料の博捜という面でも本論文は十全と称してよく、南北朝隋唐期の明堂論を完全に網羅している。しかも直接明堂に関係する部分だけを抜き出すのではなく、その段落・章節は全て採録するという方針を採っているため、資料集としてもその価値は高い。またそのほとんどに訓読が附されているのも、後進にとっては得難い津梁となるであろう。これらの点よりみて、本論文は明堂（論）研究に着実な基を奠めた画期的研究成果と称するも決して過誉ではない。

本論文に対して不満があるとすれば、それは思想史的考察になお尽くさざるところが残っていることであろう。明堂の有する政治的意味（国家の正当性）や個々の明堂論に反映された政治的状況など、明堂の政治思想上の意義は詳細に解明されている。しかし、論者は自ら、冒頭で「本論文は南北朝隋唐時代の明堂を思想史的観点から研究するものである」と宣言し、その内容を「基本的には経学研究に立脚し、関係する学問諸領域の成果を参照しながら、通時的・共時的に研究することである」と説明しているのである。その宣言からすれば、思想史的研究が十分とまでは言えないであろう。確かに経学の学術史的研究はほぼ果たされているが、経学に内在する思想性の探求は十分にはなされていない憾みがある。すなわち、なぜ明堂をめぐってあれほど論争が繰り返されたのか、またそれを支えた思考法・様式はいかなるものであったのか、そしてそれは時代とともに変化したのかしなかったのか、という疑問については考察が及んでいない。しかし、これは経学研究者全てにとっての究極的難題であり、一朝一夕に答の出るものでもないし、論者一人に責を帰すべきものでもない。論者は明堂とともに郊祀の研究も進めているので、その研究の進展の中で解答を示されることを期して待ちたい。もとより、このことによって本論文の学術的価値が揺らぐことはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2012年2月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連することがらについて口頭試問を行った結果、合格と認めた。